遊びに来ませんか？

ハウスオブジョイ、ここは愛があふれるところ

澤村信哉

ハウスオブジョイとは

長崎出身の烏山逸雄（からすやまいつお）さんが青年海外協力隊員としてダバオに派遣されたのは、一九八一年のこと。そのときに出会ったフィリピンの人々、貧しい中で懸命に生きる子どもたちの姿が忘れられなかった烏山さんは、帰国後、日本企業で働きながら自分が本当にやるべきことは何かと考え続けていました。

一九九四年、「見える行動で、見えない愛を表現したい」と心を決めた烏山さんは仕事を辞めて長崎の児童養護施設で修行を兼ねて二年間働き、一九九六年には日本での安定した生活を捨ててフィリピン人の奥さんと娘さんの一家三人でフィリピンのミンダナオ島ダバオ・オリエンタル州へ移住。一九九七年、同地で児童養護施設ハウスオブジョイを設立しました。

施設運営のために準備した資金は最初の一年で底をついたといいます。でも困難にぶつかるたびに、まるで神さまのお計らいのように協力隊時代の仲間、長崎のカトリック教会の仲間、そして、日本中の大学や教会で支援グループが生まれていきました。設立から十八年、ハウスオブジョイはフィリピン政府から優良NGOとして表彰されるまでに成長しています。

●さわむら・しんや
1976年北海道生まれ。横浜国立大学卒業後、フリピンミンダナオ国際大学、ブルガリアの初等教育機関等で日本語教師を務める。2006年より本誌バルゼレッタ等でイラストを担当、2008年よりハウスオブジョイに携わる。

私とハウスオブジョイ

一九九六年、当時大学生だった私はサレジオ会のボランティアグループに参加して、初めてフリピンを訪れました。そのときに何かやり残したような思いを抱き、翌年再びフィリピンに出かけてハウスオブジョイを訪ね、烏山さんと出会いました。

大学卒業後は日本語教師としてフィリピンで七年間、その後ブルガリアでも同じ職について働いていたのですが、二〇〇七年の十二月、思いがけない知らせが入りました。烏山さんが脳梗塞で倒れたというのです。すぐに烏山さんご本人からもメールが入ります。今までのように動き回ることができなくなったので、フィリピンに戻ってきて手伝ってくれないか、と。

ブルガリアはとても素敵な国で仕事も順調でした。私は烏山さんからの依頼を受けてどうしたものかと悩みながら、子どものころに通っていた教会で出会ったフィリピンの人々のことを思い出していました。当時の主任司祭がアイルランドの方で、英語のミサにはフィリピン人の信者さんが大勢参加していました。そこで私はフィリピンの音楽や彼らの考え方に触れ、自分の世界観を広げてもらいました。その出会いが後のボランティア参加やフィリピンとのかかわりにつながっていった――。も

子どもたちに囲まれて、中央烏山さんとアイダさん

しかしたら今はフィリピンの人たちに恩返しをするときかもしれない。

ブルガリアを引き上げた私は、二〇〇八年からハウスオブジョイのスタッフとして参加しています。

ハウスオブジョイの生活

フィリピン政府福祉局が保護した親のいない子どもや虐待などに苦しむ子どもを受け入れ、教育の機会を与え、十八歳で自立できるまで育てるのがハウスオブジョイのミッションです。現在三歳から十八歳まで、十八人の子どもたちが一緒にごはんを食べ、学校へ通い、家族として生活しています。

現地の常駐スタッフは六人のフィリピン人と副院長の私。代表の烏山さんは体調のいいときはハウスオブジョイに顔を出され、奥さんのアイダさんは院長として細やかな気配りをしてくださいます。

施設は五十名まで受け入れ可能ですが、一人のソーシャルワーカーが担当できるのは二十五人まで。収容人数が増えるともう一人ソーシャルワーカーを雇わなければならず、現在はこの人数が精いっぱいというところです。

ハウスオブジョイでは井戸の水を汲み、薪を割って火をおこして料理を作り、洗濯は自分の分を手洗いするという生活です。施設には電気もガスも水道もきていますが、フィリピンの郊外に行くと今も電気や水道が通っていない地域があります。子どもたちが十八歳になってここを出たとき、どこに行っても自立して生きていかれるだけの生活力を身につけさせるのも、私たちの大切な役目です。

ゲストハウスと竹楽器！

ハウスオブジョイの運営資金の半分は個人、団体、支える会の方々の寄付などに頼っているのが現状です。でも、かわいそうな子どもたちだから寄付してくださいということで成り立つ場所にはしたくない。施設内のゲストハウスの滞在費や楽器の販売など、自分たちの力で資金集めも行っています。

豊かな自然に囲まれたハウスオブジョイは、その名のとおり「歓びの家」です。私たちが大切にしているのは、笑顔で人と接すること、困っている人と友達になること、みんなで一緒に遊ぶこと。「遊びに来る」がコンセプトのゲストハウスは、質素なつくりながら、新鮮な海の幸満載の三食付きです。　滞在中の制約やボランティア活動の義務などはありませんが、現地の学校見学などをご希望でしたらガイド付きでご案内もできます。海からも近く、船で三十分も沖に出れば素晴らしいサンゴ礁が堪能できます。海は透明度も高く、天然の水族館、ダイビングも楽しめます。子どもたちとの触れ合いもあり、今は大学生の研修などでもご利用いただいています。

もう一つの資金源は竹の楽器です。子どもたちと一緒に山で採ってきた竹を乾燥させて炙り、削って穴を開け、竹製のサックスを作ります。一見縦笛のようですが音域はニオクターブ、楽器としてのクオリティーも高く、響きは立派なサックスです。この楽器は求められる方も多く、売り上げはハウスオブジョイの運営資金に当てています。

また、太い竹を束ねた木琴や弦を張った竪琴も作って子どもたちと竹音楽隊を結成、その演奏の様子をDVDにしてHP上で販売したところ、去年作った二百枚が今は四枚を残すのみという大好評でこれも貴重な資金になりました。

竹サックスと音楽隊の CD

就労支援も大切です

二〇一五年までに、約二百人の子どもがハウスオブジョイを卒業して、自立しています。中には工場で正社員として働き、収入も安定したのでハウスオブジョイに残っていた六人の兄弟をひきとり、一緒に生活して面倒を見ているという卒業生もいます。

卒業生が自立している姿は、年下の子どもたちの大きな希望になりますので、就労支援も私たちの大事な役目。フィリピンの日本企業に、ハウスオブジョイの卒業生を正規雇用で雇ってもらうようにお願いに伺ったりもしています。

学校に行こう！

フィリピンは義務教育制度はありませんが小学校、中学校は公立で、授業料は無料です。それでも制服代、文房具代、授業で使う紙代やコピー代などは別途必要です。それらの費用が払えず、家族と暮らしていても学校に通えなかったり、学業を途中で断念する子もいます。ハウスオブジョイはそのような子どもたちのために「カシンカシン奨学金」を立ち上げ、就学支援を行っています。

あなたはだぁれ？

最近、フィリピンはシステム化が進み、出生届や就学証明書なども中央で管理するようになりました。とても便利なのですが、それによる弊害も出てきています。

フィリピンでは読み書きできない親世代が多く、届け出などもいい加減で、一人の人間の出生届、入学手続き、転校の書類などで名前の綴りが異なるというケースはよくあること。かつては顔パスでよかったのですが、中央の一括管理になると書類の不備は通用せず、同一人物とみなされないため入学や卒業が認められないという状況も生じています。そこで、読み書きのできない親に代わり関係機関をまわって同一人物であるという証明を取り、書類を整え直すお手伝いプロジェクトも行っています。

神さまといつも一緒

ハウスオブジョイに来る子どもたちは、それぞれに過酷な生い立ちを背負っています。親から虐待を受けたり、置き去りにされたりしてここに来た子どもは、初めはみんな無表情です。でも、ここで生活している子どもたちは新しい仲間を喜んで迎え、いろいろとお世話をするのが大好き。それで何週間かするとどの子もみんな笑顔を取り戻します。もちろん子どもですからケンカはします。でも陰湿ないじめはありません。基本的にみんな明るいし、どんなにつらい体験をしていても、子どもたちの心がすさんでいたり、親を恨んでいたりということはありません。

そもそもフリピンの人は根本的にポジティブなのだと思います。自分の生活を肯定的に考える人が多くて、これとこれがあるから世界は楽しいって、そういうふうに考えられる人が多いのでしょう。

一方で、根本的にポジティブということが何十年も前からの貧富の差がなくならなかったり、いろいろな社会問題が解決しない原因になっているということもあるのかもしれません。問題を解決しないと幸せになれないのではなく問題と一緒に生きていく、問題の中でも楽しさを見つけて生きていくという姿勢ですから。

でも解決のことばかりを考えて暗くなっているよりはいいんじゃないかな。フィリピンの人たちは、どんな状況においてもその中に神さまの恵みを見つけ、楽しいことを探す才能があるようです。ある意味でこれは徹底的な神さまへの信頼でしょう。大丈夫だよ、最終的には神さまが何とかしてくれるからという共通の思いが、本当にあるんです。それがすごい。強いというか、素敵だと思います。

貧しさから抜け出すということは、お金もちになることではなく、愛の中に生きるということ。生まれた家庭に恵まれなかった子たちが、いつか愛にあふれる家庭を自分の手で築いていく、その力を彼らの中に育てること、それが私たちの使命であり、夢なのです。